

2024年度 入学試験問題

国語

(60分)

〔注意〕

- ① 問題は㊦～㊨まであります。
- ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
- ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入のこと。
- ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入のこと。
- ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。

西大和学園中学校

問題は次のページから始まります。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

新発見は無から生まれるのではない。コロンプスの卵がよい例だが、解決がわかってしまった後では、「なあんだ、そんな簡単なことか」という反応が返ってくるように、実は答えがすでに目の前にあるのに、常識が邪魔してそれが見えてない場合が多い。常識が何らかのきっかけで取り除かれ、それまで隠されていたものが見えるようになる。これが発見だ。古い認識枠にとつては、ノイズでしかなかったためにまったく無視されていた要素が、新しい認識枠におかれることで急に重要性を帯びる。したがって創造的発想をするためには、常識から距離を取る必要がある。

次のような愚か者の物語がある。ある夜、一人の男が道ばたで何かを探している。どうしたのかと尋ねると、鍵を落としてしまったので家に入れないと言う。この近くで落としたのは確かなのかと確認すると、いや、落としたのは他のところだけど、暗くて見えな¹い。だから、街灯近くの明るいところで探していると答えたという落ちだ。本当に問題になっているところを探さないと、自分に慣れた思考枠内で解決を探すのは、街灯近くの方が明るいという理由から、そのそばでいつまでも チマナコ ^① になって探しものをする愚者と変わらない。

高学年の学生に比べ、どうも新入生の方が教えるにくい。一年生は何も知らないから理解が遅いのだと初めの頃は考えていたが、その解釈は誤っていた。彼らの飲み込みが悪い原因は知識不足ではない。実はその反対に、常識と呼ばれる知識すなわち偏見に彼らは縛られていて、既存の常識に反する講義内容が浸透しにくいからだ。

自然科学と違って、人文・社会科学ではテーマが日常生活と ミツセツ ^② に連なっている。そのために、研究の訓練を受けていない人でも多くの知識を持っている。物理学や化学では自分の無知を学生が素直に認めるから、授業内容に対する抵抗はあまり起こらない。ところが恋愛とか責任などというテーマになると、常識が邪魔して論理的な思考展開がかえって難しい。もちろん物理学でも、時間・空間・物質などといった当然わかってい³るつもりの概念を吟味するのは容易でない。しかし人文・社会科学の場合は、考察対象と常識との距離がより近いので、常識という名の偏見がよけいに邪魔になり易い。

とはいえ、高学年になり専門の知識が増えるとともに、その分野に特殊な考え方に センノウ ^③ されてゆく。そのため、素人なら簡単に気づくことでも、専門家には見えないという逆の弊害が現れる。だから他の分野の本を読んだり、外国に暮らしたりして違った見方に触れることが重要になる。

こんなジョークがある。垣根に小さな穴が空いていて、そこから牛が尻尾を出して振っている。それを見た物理学の教授は、「どう

やって牛は、あの小さな穴を通り抜けて垣根の向こうに行ったのだろう」と真剣に悩み出したという。普通に考えれば何でもないので、専門家はかえって知識が邪魔してものが見えなくなる。④ジタイをこの話は面白おかしく表現している。

我々は誰でもいわば色つきメガネをかけているようなもので、レンズが起す変色や歪みを通してしか人間は外界を把握できない。

ある対象を前にするや否や、私たちは自らの持つ世界観にしたがってすぐさま対象を解釈する。知識を習得し、思考訓練を積み、あるいは I を生きることとおして、我々の眼を覆うレンズの色はどんどん変化する。かといって、②レンズの色が淡くなり、③無色透明になったりすることはありえない。哲学者であろうとも科学者であろうとも、世界観という色メガネを必ずかけて生きている。メガネをはずして外界を直接把握することなど人間には絶対にできない。

③新しい知識の獲得とは、空の箱に何か新しいものを投入するようなことではない。記憶と呼ばれるこの箱にはすでに様々な要素がいつぱいに詰まっている。何らかの論理にしたがって整理されたそれらの要素群の中に、さらに新しいものを追加するような状況を想像しよう。そのままでは余分の空間がないから、既存の要素を並べ替えたり、場合によっては一部の知識を放棄しなければ、新しい要素は箱に詰め込めない。

子供の頃から我々は夥しい量の情報を摂取・受容してきた。ところで赤ん坊は無知な状態でこの世に生まれてくる。しかし無知のために外部情報の受容が妨げられるわけではない。それどころか反対に、彼らは驚くべき速度で新しい情報を咀嚼・消化してゆく。それは、年を取るにしたがって構造化される記憶がまだ嬰兒に備わっていないからだ。外国語は幼少のうちに学ばなければ、後にどんなに努力しても発音や文法の誤りを矯正できないが、それは、母語を習得するにつれ、固有の言語構造ができ上がり、他の言語の世界を受けつけなくなるからである。

④知識の欠如が問題なのではなくて、その反対に、知識の過剰が創造活動の邪魔をしている。⑤ユウエキだからといって新しい情報がある。常にすんなりと受け入れられるわけではない。したがって創造的思考のためには、常識的見方とは違った角度から材料を見直す必要がある。

【語注】

(注1) 咀嚼 … 食べものをよくかみ砕いて味わうこと。言葉や文章などの意味をよく考えて理解すること。

(注2) 嬰兒 … 生まれたばかりの子。

(小坂井敏晶『異邦人のまなざし』による)

問一 ―― 部①⑤のカタカナを、それぞれ漢字に直さない。(かい書で、ていねいに書くこと)

問二 ―― 部(a)「ノイズ」の本文における意味として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 未知のもの イ 親しいもの ウ 無力なもの エ 邪魔なもの オ 騒がしいもの

問三

1

 に入る言葉として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一進一退 イ 百戦錬磨 ウ 唯我独尊 エ 勸善懲惡 オ 喜怒哀楽

問四 ―― 部1「街灯近くの明るいところ」とありますが、これとほぼ同じ内容が書かれているところを、本文中から十字で抜き出さない。

問五 ―― 部2「レンズの色が淡くなったり、無色透明になったりすることはありえない」とありますが、どういうことですか。本文の語句を使って四十文字以内で説明しなさい。

問六 ―― 部3「新しい知識の獲得とは、空の箱に何か新しいものを投入するようなことではない」とありますが、筆者は「新しい知識の獲得」についてどう考えていますか。本文の語句を使って四十文字以内で説明しなさい。

問七 ―― 部4「知識の過剰が創造活動の邪魔をしている」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 古い認識枠にとらわれていると、新たな発想を受け入れられなくなってしまうということ。

イ 新たな発想を生み出すには、むしろ、知識の少ない新人生や赤ん坊の方が適しているということ。

ウ 常識は世の中の人の多数派が受け入れている知識であり、平凡になりがちなものであるということ。

エ 知識が記憶の底からあふれ出すほど多くなると、新たな情報を吸収できなくなってしまうということ。

オ 思考方法を規定する言語の習得は、新たな知識の獲得とともに困難になってゆくものであるということ。

問八 本文の内容としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「コロンブスの卵」は常識から距離を取ることに失敗した例である。

イ 恋愛のように考察対象と常識との距離が遠いと常識が邪魔をする。

ウ 哲学者や科学者などの専門家も外界を直接把握することはできない。

エ 専門家は知識が過剰なため、新たな知識を獲得することはできない。

オ 子どもも言語を習得するに従って、外界を認識する力は失われていく。

二

商店街で小さな薬局を営む和田さんは、最近高校生の息子の進学のことで、たびたび妻（奥さん）と喧嘩を繰り返している。次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

和田さんは、市役所を定年退職してから二年近く、鬱陶しい毎日を送っている。

昭和薬局に婿入りして以来三十年間、夫婦仲は当たり前、子供たちは出来がよく、波風のない暮らしを営んできた。市役所では戸籍係主事という地位で終わったが、特に不満はなかった。

「退職したら、おれも薬局の仕事に精を出すぞ。お前だけでやってきた経営におれが手を貸して、もっと繁盛する大きな薬局にしてやる」

当初は意気軒昂だったが、間もなくそれが現実とかけ離れた考えであることに気づかされた。

昭和薬局のある駅前商店街は、昔からの店々が（A）軒を並べていて、両隣のいづれかが空かなければ店舗を拡張することができない状態にある。そのうえ最近、商店街の近くに廉売薬品のチェーン店が進出してきて、「薄利多売」で客足を誘っている。——和田さんが経営手腕を発揮する場面は、既に失われていた。

さらに和田さんを消沈させたのは、奥さんの存在である。長年、薬局を切り盛りしてきただけあってキャリア豊富で、夫の手を借りなくても充分に店をやっている。しかも、奥さんは薬剤師である。白衣をたとえば、夫をも寄せつけない専門家の威厳が漂うのである。

和田さんは、五十半ばにして、自分の人生に疑いを懐きはじめた。

—— おれは、何をなすべきなのだ。おれに存在価値はあるのか？

和田さんは、毎日、焦げ茶色のカーデガンを羽織って店先に佇んでいる。たまに薬品問屋から配送されるダンボールの荷解きが担当なのだ。

「コンピュータってのは、そんなに面白いのかい。一生の仕事にしていけるんだろな？」

和田さんは、自分より十センチも背の高い息子を見上げた。図体は大きいですが、父親に似ておとなしく、^a引っ込み思案な性格である。

「とにかく、これっきやないって、中学のときから決めてたんだよ。……好きなんだ、ぼく」

「そうか。まあ、時代の先端を行ってる分野だもんな。役所に機械が来たときも驚いた。膨大な戸籍簿がそっくり機械に入っちゃってさ。キーを叩くだけで、一発で出てくるんだもの。時代が変わったなって、ほんとに思ったよ」

息子は、父親の述懐に耳を傾けている。二人で歩くのは、息子が幼かったころ以来である。和田さんが退職後はじめた早朝散歩に、ときどき息子も早起きして、くっついてくる。家のなかではできない話をするのが狙いである。

「まあ、お母さんのことは任しとけ。……いま、うまく納得させる方法を考えてあるんだ」

「大丈夫？ わが家の女帝だからね、相手は」

「なあに、どんな鉄壁にも弱点はあるものだよ」

そういつて笑ってみせたが、和田さんに奥さん攻略の勝算があったわけではない。それどころか内心では、白衣をまとった奥さんがますます聳え立つ壁のように思えて仕方がなかった。

——なんとかしなくちやな。宙ぶらりんは、おれだけでたくさんだ。

和田さんは、（B）そう思っている。これまで市役所に勤めていても、気持ちのどこかに「薬局の婿養子」というところがあった。適当に波風立てずに暮らしていて、定年になったら薬局をやればいいんだ。そういう安心感にぶら下がっていたような気がする。

——結局、何かに賭けることも、一生懸命になることもなかった。宙ぶらりんに生きてきて、いまだに宙ぶらりんなんだ。

「おい。コンピュータのことは、当分の間、口にしてはいけないぞ。分かったな？」

和田さんは、息子の顔を見上げて、そっくりいわたした。

「やっぱり、あんたの考え違いでした。……あの子、薬科大に入ってもいいってってますよ」

奥さんが勝ち誇った顔で和田さんにいったのは、二日後のことだった。

「へえ、そうかい。……案外だったな」

「何が案外よ。あの子は、ちゃんとわきまえてるんです、自分の立場ってものをね」

「優しい子なんだ、あいつは。……しかし、もしかして、何か条件をつけたんじゃないか？」

奥さんは、急に憂い顔になった。凶星を指された感じである。

「……薬局は継ぐけど、こんなちっぽけな店じゃ嫌だっていうの。……そんなこといったってねえ」

「そりゃ、そうだろ。おまえだって、この前いつてたじゃないか。……薬科大を出た若い娘が、こんなちっぽけな薬局に嫁に来るもん

かつて」

「そりゃあ、いったけど……」

「なんとかして店を拡張することだな。これは、跡を継いでくれる息子のために、ぜひとも親の代でやっておかなくちやならないことだよ」

「だって、この商店街じゃ無理よ」

「それならやつぱり、どこかに移転して新しい店を出すことだ。この店を売って、新天地を見つけるのさ。幸い、おれの退職金も手つかずだしな」

「そんなこと、急にいい出しても……」

「まあともかく、この計画は、おれに任せてくれ。……これは、おれも忙しくなるなあ」

和田さんは、ようやく仕事にありついた喜びを隠し切れないように、（Ｃ）外出の支度をはじめた。

「どこ行くのよ、急に？」

「善は急げっていうからな。……さっそく土地に詳しい奴に相談してくるのさ。ほら、役所の先輩だった人で、不動産屋になったのがいたろう」

それから二週間、和田さんは毎日朝から夕方まで外出をつづけた。新しい店の候補地を懸命に探しているのは明らかだった。

「おい。ようやく、これという場所を二カ所だけ見つけたぞ」

ちょうど二週間後、奥さんに図面を見せながら和田さんがいった。一カ所は来年完成するニュータウンの団地内、もう一カ所は地下鉄が郊外に延びてできた新駅の周辺。——いずれも、いまの町からは遠く、奥さんが初めて聞く地名だった。

「両方とも、これから発展する場所だよ。いまから頑張れば、あいつが大学を出るころには、順調な店になつてはすだ」

和田さんの話を聞きながら、奥さんは心細い表情をした。いつもの威厳は影をひそめていた。

「そんなに遠くへ行かなきゃダメなの？」

「そうじゃないと土地が高くて、手が届かないんだよ。……その代わり、大きな店舗ができるぞ。間口三間で、いまの倍だ。奥行きも相当とれるから健康食品だの、漢方薬だの、なんなら化粧品だって扱うことができるじゃないか」

「ふうん。……それはそうだけどねえ」

それから二、三日、奥さんはしよげ返って、何をするにもうわの空という状態になった。まるで和田さんの鬱陶しい毎日が、奥さんに乗り換えてしまったような具合である。

「おい。……例の土地、どうするんだ。お前も、一度は見に行かなきゃ話にならないぜ。いつまでも放っておけないんだ。よかったら、すぐにも手付けをうっておかなけりや……」

和田さんは、せつづくように繰り返した。

「お前が、どうでもいいってんなら、おれ一人で決めてくるぞ。……おい。はつきりしろよ」

和田さんは珍しく顔を引き締めていい切った。その顔面には、新しい計画に燃えている男の、^cのつぴきならない迫力がみなぎっていた。

「ごめんなさい、あんた。……どうしても決心できないの。この店を売って、よその土地へ行くなんて、いままで考えたこともないんですもの」

「それ以外に店舗を大きくする方法があるってのか？ おれが懸命に探してきた土地を見もしないで、そんないいかたはないだろう？」

「……だって、この町はあたしが生まれて育ったところなのよ。住み慣れてるし、仲のいい友だちもたくさんいるのよ」

奥さんは、急に哀願するような顔になった。

「それに、五十歳をすぎて、知らない土地で、一から店をやるってのは、並大抵のことじゃないわ。……あたしには、とてもできない」

「そんなこというなよ。……お前らしくもない」

「あんたにはわるいけど、どうかこのままで店をつづけさせてちょうだい。お願いよ」

⁴奥さんは、いまにも泣き出しそうな表情で、（D）和田さんに頭を下げた。

「……それじゃ、お母さんは納得したんだね。ばくが薬科大に進学しないことを？」

「ああ、しかたないだろ。お前の出した条件を果たせないんだからな」

和田さんと息子は、朝早い街路を歩きながら話している。⁵二人とも、なんとなく意気が上がらない様子である。

「うまくいったのは嬉しいけど、なんだか可哀そうな気もするな、お母さんが」

「それは、いうなよ。……お母さんもお前も、乗り越えなきゃならなかったことなんだから」

和田さんは、街路の先にたなびいている朝霧に目を凝らしながら、唇をゆがめていった。

「……ぼく、途中で、はらはらしちゃった。だって、お父さん、まるで本気になって土地探しをしてるみたいだったんだもの」
息子がぐすくす笑いながらいうのを、和田さんは憮然とした表情で聞いていた。ゆがめた唇を、前歯で噛んだ。

息子には、それが見えないうるしく笑い声のまま聞いた。

「あの二週間、土地を探すふりをして、毎日朝から、いったいどこに行ってたの？」

「……土地を探しに行ってたのさ」

和田さんが、（E）答えた。

「だって、あれは嘘だったはずでしょう？」

「ほんとに、土地を探しまわってたんだよ」

「じゃあ、あの二カ所の土地は、ほんとにお父さんが見つけてきたものだったの？」

「そうさ。……もし、お母さんさえオーケーしたら買うつもりだったんだ」

6 息子は、呆れ顔で立ち停まった。

「ちよつと待ってよ。お母さんがオーケーしてたら、ぼくはどうなったのよ。薬剤師にならなきゃならなかったってことなの？」

「まあ、そうだな。……お前にとつても、おれにとつても、あれは大きな賭けだったのだよ」

（内海隆一郎『宙ぶらりん』による）

【語注】

（注1） 戸籍 …… 国民各自の本籍・氏名・生年月日・親族との関係などを記載した公文書。

（注2） 主事 …… その事務を中心的に扱う人。 （注3） 意気軒昂 …… 意気込みが盛んな様子。

（注4） 廉売 …… 安く売ること。

（注5） 薄利多売 …… 品物一つあたりのもうけを少なくして安く大量に売ることにより、全体としてもうけをあげること。

（注6） 婿養子 …… 養子縁組をして、婿（妻の家にはいる男性）となる人。

（注7） ニュータウン …… 新築住宅を建てるために郊外に新しく宅地造成される市街地。

（注8） 間口三間 …… 「間口」は土地・家屋などの通りに面している正面の幅。「二間」は一・八二mに相当する。

（注9） 手付け …… 「手付け金」の略。売買などの契約が成立した際、実行の保証として前もって支払う金。

問一

——部 a ～ c の本文中における意味として最もふさわしいものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「引っ込み思案な性格」

- ア 人付き合いが苦手で独りを好む性格
- イ 何事も考えすぎて行動に移せない性格
- ウ 思慮分別があるが協調性はない性格
- エ 物事を悪い方にばかり考えてしまう性格
- オ 進んで積極的に行う意欲に乏しい性格

b 「図星を指された」

- ア 秘密を明らかにされた
- イ 嫌なことを言われた
- ウ 急所を言い当てられた
- エ 気分を害された
- オ 心配事を増やされた

c 「のっぴきならない」

- ア 他者を寄せつけないような
- イ 何としてもやり遂げそうな
- ウ 諦めさせるのが難しそうな
- エ 演技とは到底見えないような
- オ 今すぐに結論を迫るような

問二

——(A) ～ (E) に当てはまる語としてふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

- ア いそいそと
- イ ぼつんと
- ウ とうとう
- エ まじまじと
- オ びっしりと
- カ つくづく

問三

——部 1 「おれは、何をなすべきなのだ。おれに存在価値はあるのか？」とあるが、和田さんがこのような心境に至ったのはなぜですか。その理由を説明したものととして誤っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 医薬品の専門家である奥さんに比べて、素人の自分に出来ることは限られているから。
- イ 医薬品のチェーン店の進出のため、現在の場所では売り上げを伸ばすのが難しいから。
- ウ 市役所では主事という中途半端な地位で定年退職を迎え、たいして出世できなかったから。
- エ 昭和薬局は商店街にあり、両隣の店が営業を続けている限り店舗の拡大は望めないから。
- オ 薬局は奥さんが長年独力で営んできたために、自分の力を借りなくても特段問題ないから。

問四

——部2「宙ぶらりんは、おれだけでたくさんだ」とあるが、和田さんは自分のどのような点を「宙ぶらりん」と表現しているのか。四十字以内で具体的に説明しなさい。

問五

——部3「奥さんが勝ち誇った顔で」から、——部4「奥さんは、いまにも泣き出しそうな表情で」までに至る「奥さん」の心情の変化について説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息子の将来に関して思い通りに事が運びそうなることをうれしく思っていたが、和田さんとやりとりするなかで息子の優しさに甘えていただけだと痛感し、罪悪感にさいなまれるようになっていく。

イ 日ごろから夫婦のいさかいのもとであった息子の進路の件が落着きそうではあったが、和田さんもまだ諦めてはいない様子を見てとり、これ以上どのように説得すればよいか途方に暮れている。

ウ 息子が自分の跡を継いでくれることに誇らしさを感じていたが、そのためには生まれ育って住み慣れた街を捨て、知らない土地で暮らさなければならぬこととなり、寂しさを感じている。

エ 息子を跡継ぎにできそうなのに満足していたが、息子の出した条件を満たしてあげるための思い切った決断が、自分にはできないと痛感し、断念するほかなくつらく感じている。

オ 息子が父親の意向ではなく自分の意向に従うことに優越感を覚えていたが、自分の弱みにつけこんだ和田さんの思わぬ反撃にあって、自分のふがいなさを思い知って弱気になっている。

問六

——部5「二人とも、なんとなく意気が上がらない様子である」とあるが、この時の息子と和田さんそれぞれの様子を説明したものと最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息子は、今回の一件で母親が営んできた薬局が親の代で閉店せざるをえなくなったことに申し訳なさを感じており、和田さんも、息子のために仕方なくしたことはいえ、跡継ぎがいなくなることに多少の不安を覚えている。

イ 息子は、自分の自由な進路選択のために父親がやりがいのある仕事をできなくなったことにいたたまれない思いでいるが、和田さんは自分の夢を優先するあまり、妻にづらい決断をさせてしまったことに申し訳なさを感じている。

ウ 息子は、母親にづらい思いをさせることで自分の進路を確保するよりも、自分が直接母親と話し合う機会を設けるべきだったと後悔しており、和田さんも、遠回りな方法をとらずに家族でじっくり話し合うべきだったと悔やんでいる。

エ 息子は、自分のやりたいことを優先せずに、母親が人生をかけて営んできた薬局を継ぐべきだったと自責の念を抱いており、和田さんは、せっかくいい店舗の移転先を見つけたのにうまく妻と息子を丸め込むことができずに落胆している。

オ 息子は、母親に苦渋の決断を強いることで自分に跡を継がせることを諦めさせたことに多少の罪悪感を感じており、和田さんは、息子と同様の思いもあるが、それに加えて店舗拡大の計画が実現しなかったことも少し残念に思っている。

問七 ——部6「息子は、呆れ顔で立ち停まった」とあるが、どうして「息子」は「呆れ」ているのですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ただでさえ父親と嘘をつき母親をだましたことに気がとがめていたのに、父親は演技としてではなく、実際に移転先の土地を探していたと知り、さらに母親に追い打ちをかけて傷つけることになりかねなかったと、父親の軽率さに驚いたから。

イ 父親は完全に自分の味方で、コンピュータ関連で進学を考えている自分が薬局を継がなくてよくなるように、嘘の移転話をでっちあげていると思っていたのに、実際に移転先の土地を買う可能性もあったと知り、だまされたと感じたから。

ウ 医薬品のチェーン店が進出してきている現時点では、いくら郊外の土地で大型店舗に拡大したとしても、薬局が繁盛する見込みはないと考えていたのに、父親が本気でチェーン店に対抗しようと考えていたと知り、見通しの悪さを軽蔑したから。

エ 父親は自分の進路に理解を示してくれ、進路の自由を認めない母親を諦めさせるためにうまく策を考えて立ち回ってくれていると思っていたのに、実際は父親も自分に跡を継いで欲しいと考えていたと分かり、憎しみを覚えたから。

オ 父親が現在の小さな薬局ではやりがいを感じていないことには薄々気づいていたものの、自分の進路のことを優先して協力してくれるとばかり思っていたのに、この機に乗じて自分の計画を強行しようとしていたと知り、見損なったから。

問八

——部7「お前にとっても、おれにとっても、あれは大きな賭けだったのだよ」とあるが、どういうことか。それぞれの「賭け」の内容が分かるように、九十字以内で具体的に説明しなさい。

三 あとの各問いに答えなさい。

(1) 次のAさんとBさんの会話を読んで、あとの問いに答えなさい。

A…最近、言葉の「誤用」に興味を持っているいろいろ調べてるんだ。毎年、文化庁が「国語に関する世論調査」を実施していて面白いんだ。

B…ゴォウ……？ ああ、使い方の間違いか。たとえば、どんなものがあるのか教えて。

A…有名な例だと、「情けは人のためならず」(平成十二・令和四年度同調査)って聞いたことあるでしょ。

B…うん。「情けをかけて親切にしよう」と、その人のためにならない」ってことでしょ。

A…それが違うんだ。正しくは「人に情けをかけて親切にしておけば、A」って意味なんだって。

B…なるほど、それは知らなかった……。他には？

A…「役不足」(平成十四・十八・二十四年度同調査)って言葉もよく聞くでしょ。

B…うん、それなら僕もちょうど昨日使ったよ。少年サッカークラブの監督かんとくから「副主将」に任命されたんだけど、僕にはリーダーシップなんてないから、「僕には役不足です」っていったん断ったんだ。今日また話をすることになってるけど。

A…それがまさに「誤用」だよ。「役不足」の正しい意味は、「その人の実力に対して、与えられた役目が軽すぎてふさわしくない」ってことなんだ。だから、君が断るつもりなら、「B 不足」と言うべきだったんだよ。

B…知らないうちに「誤用」してたなんて……。監督が正しい意味をご存じだったら、改めて今日Cに任命されるかもしれないな……。

A…あはは、本当だね。

B…正しい意味を知っておかないと、相手に誤ったメッセージを伝えることになるし、相手の言葉も間違って理解しちゃうことになるね。

A…そうなんだ。

B…よし、僕も四月に西大和学園中学校に入学したら、しっかりと国語の授業を受け、言葉の意味を正しく理解するぞ。

問一

A

に当てはまる適当な文を書きなさい。

問二

B

に当てはまる適語を漢字一字で答えなさい。

問三

本文の会話の流れを理解した上で、

C

に当てはまる適語を漢字で答えなさい。

(ii) 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 連休中の新聞の見出しに「六日のアヤメ晴れ？」というのがあった。うまい見出しだな、と思っていたらそのとおりになってしまった。

2 時期おくれで役に立たない場合のことを六日のアヤメ、あるいは六日のショウブというが、連休あけになってやっと現れた青空は、観光業者にとってはまさに「六日の五月晴れ」だったろう。

3

4

5 緑の幻想的な競演をたのしみながら、つい最近東京で見たニコライ・ダンスシアターの舞台を思い出した。

6

7

8

9 ニコライはその虚色を駆使^{くし}することで人々を幻想の世界に誘^{さそ}う。人工的な操作で幻覚をつくりだせるという一種の技術信仰^{しんぎょう}がいかにアメリカ人らしくておもしろかった。

10 アメリカのフィリップ・モリス社が視覚芸術の粋^{すい}をこらした幻想的なオートメーション工場を建てたという話をきいたが、巨大な管理社会では、人々は人工的な幻想の世界に安らぎをもとめるのだろうか。

11 私たち日本人はむしろ自然な色の中に幻想をもとめがちだ。とくに五月、移りゆく緑の色の变化に、生命のドラマを見、期待に胸をはずませる。

12 「初夏には純粹な期待の美しさがある」といった詩人がいた。

(朝日新聞『天声人語』による)

問一——部「うまい見出しだな」とありますが、どういふ点がうまいのですか。四十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問二 次の文章は12段落で構成されています。段落③・④・⑥・⑦・⑧に入るものとして最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、文章を完成させなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア 刻々に変化するゆたかな色彩は、私たちが木々の緑に見る色と違って、人工的な虚色である。

イ モミジの緑には黄がまじり、ヤナギは青みをおびている。くすんだ緑のクスやシイも、よく見ると紅色がかった若々しい葉を先端につけている。

ウ 光と色彩の魔術師といわれるアルウィン・ニコライは、朱や紅、黄、うすあお、白銀色などの人工的な光彩を舞台にちりばめ、踊り手の動き、形、それに音を組み合わせ、幻覚的な舞台をつくりあげるのに成功していた。

エ 現代は人工着色のような「見かけの色」がヤングファッションの主調になりつつあるという学者の説があった。ブラウン管に現れる虚色に慣れたせい、あざとい色彩をもとめるといふのだ。

オ 久しぶりに五月の光をあびた木々の緑の多様さに目が吸いこまれそう。ラクウショウやカツラは淡い若緑色だが、トチの木やコブシの緑はひととき濃い。

【語注】

(注) アヤメ、ショウブ、モミジ、ヤナギ、クス、シイ、ラクウショウ、カツラ、トチ、コブシ……すべて植物の名称。

(注) アルウィン・ニコライ……ロシアの演劇家。

(注) ブラウン管……旧型のテレビのこと。

(注) フィリップ・モリス社……世界最大のたばこ会社。

(注) オートメーション……人間に代わって自動的に行なう機械装置。

国語解答用紙



240114-10

↓ここにシールを貼ってください↓

受験番号	氏名

※のらんには何も書かなくていい。

一	問一	①		②		③		④		⑤		※	
	問二			問三				問四					
	問五												
	問六												
	問七												
	問八												

二	問一	a		b		c					※
	問二	A		B		C		D		E	
	問三										
	問四										
	問五			問六			問七				
	問八										

三	i	問一						問二		問三		※
	ii	問一										
	問二	3		4		6		7		8		

※